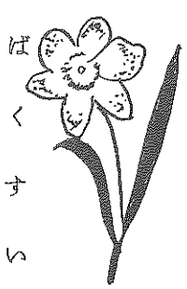
琵琶機関紙　京絃　第三二四号　京絃社

井伊大老と安政の大獄（三）



橘本景岳が国事に奔走したのは、二十四才の秋から二十五才の秋までの一年間で、その身分は越前藩主の秘書に過ぎないのであるが、視野広く、識見高く、立案雄大で独創的、更に態度慎重礼節、接する人々を感激心服せしめる等、どの点から見ても当時の第一流者で、前後幾百年の間に比類を見ないのである。

景岳は西郷隆盛を訪ねて国家の重大事について協力を求めた。西郷は七歳年長で体格も雄大であったので、貧弱短駆、痩せた白顔の景岳を見て最初は之を軽んじたが、ひとたびその説を聴くに及んで悉く感激し、全面的に之に追髄する約束をした。また景岳は川路左衛門尉を訪ねた。川路は当時最も識見があり、気骨もあり勢力を持つ幕府の奉行で、初めは頗る横柄で接したが、景岳の所信を聴くうちに驚き、翌日人に語って「昨日橘本景岳と話したが、自分の身体を半分切りとられたような気がした。」と云ったという。

西郷を心服せしめ、川路を屈服せしめた景岳の国難打開策とは如何なる内容であったか。

㈠外交問題。鎖国とは元々道理にもかなわず、今日の状勢では不可能、断然開国して世界万国と交易し、忠孝仁義は自ら固く守ると共に諸外国にもこれを説き、同時に物質文明、精密機械などは外国より採り入れる。その為めには世界情勢の動きを観察する必要がある。将来国際連盟が出来て万国手を繋ぎ、戦争防止の方向に進むだろうと考えられるが、その場合、国際連盟指導者は先づイギリス若しくはロシアであろう。日本がこのまま孤立するのは危険で何れかの国と同盟を結ぶのが得策であり、仮りに日英同盟が出来れば必然的に日露戦争が起ころう。開国する以上、その見通しと覚悟を要する。

㈡将軍後嗣の問題。開国によって英国又は露国と一戦を覚悟しなければならぬとすれば、これは国家浮沈の一大事である。従って政局担当者の将軍は、国体に明らかで大局の判断を誤らない英明の人を選定する。現在問題になっている二人の候補者中、慶喜は既に二十才を越え、家茂は十才余り。慶喜は水戸派で英明なるが故に、朝廷に奏して慶喜を将軍の後嗣とすべきである。

㈢政治の大改革。将来外国と一戦を覚悟しての開国だから、現在の儘での政治機構では駄目で、内務大臣水戸斉昭、越前慶永、薩摩島津斉彬等、外務大臣肥前鍋島斉正、その下の局長川路左衛門尉、岩瀬肥後守等、有名達識の士を広く天下に求めて内務、外務の要職に就かせる。京都の守護職には尾張の慶恕、鳥取の池田慶徳等、その次長に彦根の井伊、大垣の戸田、蝦夷（北海道）長官は宇和島伊達宗城、土佐山内豊信。この陣容を以てすれば愉快に改革が出来よう。その上ロシア、アメリカから御傭教師として各方面の専門家五十人ほどを招いて学校を建て、生産を講ずる。

景岳の雄大な国策は以上の通りで一点の私慾もなく、又頑固もない。然るに景岳は之を朝廷、幕府に説き又諸藩に説いた為に罰せられた。何故大老井伊が景岳を死刑に処したのか。それは井伊が徳川幕府従来の体制を維持せんと考え、家康以来天下の政治は朝廷の委嘱により幕府が専決すべきで、鎖国も開国も、将軍の後嗣も総て幕府の権限内に在ると考えていたからで、一介の陪臣が越権の挙に出た

第十八回春のおさらい会

五月五日㈫昼東京四谷須賀神社大広間、主催洲鳳会本部（会長山田洲鳳氏）。河中島ー佐藤、紘松崎▼重衡ー伊藤、紘中村。外に詩吟二十九、吟舞八、書道吟一、剣舞一。

村木桜柳芸道五十年記念演奏会

五月九日㈯昼立川市健康会館三階ホール、後援錦琵琶一門ほか。扇の的ー水藤桜子▼井伊大老ー網野桜苑▼新撰組ー鈴木桜陽▼しぐれ曽我ー斉藤桜玲▼うつぼ猿ー箕村桜州▼竜の口ー坂井眺水▼湖水乗切ー小川吐水▼勿来の関ー水藤五朗▼花の敦盛ー木原綾子▼舟弁慶ー賛助加藤錦陽▼名月逢坂山ー同鈴木流泉▼義士の討入ー会主村木桜柳。（賛助出演予定の若水桜松氏急死のため欠演）。外に詩吟二。録音）故大舘洲楓▼挨拶ー吉川英史▼謝辞ー大舘清次▼桜狩ー大舘美江子・紘松崎洲陵、桑名洲聖▼（以下来賓・いろは順）大楠公ー友吉鶴心▼湖水渡ー押田旭窈▼吉野山懐古ー中谷裏水▼鴨川の露ー山崎旭萃▼花紅葉ー前田秋声▼秋風故郷の山ー藤巻旭鴻▼武蔵野ー遠藤鶴東▼本能寺ー都錦穂▼勿来の関ー水藤五郎▼（須磨の浦を演奏予定の若水桜松氏急死のため欠演）。外に雨宮国風外の吟詠数番。

京都琵琶協会五月例会

五月二十四日㈰昼本部平井会長宅（次号詳報）

第四回琵琶楽名流会

五月三十一日㈰京都商工会議所ホール、主催日本琵琶楽協会関西支部。（次号詳報）

訃報

若水桜松氏　五月二日急逝。謹んで哀悼の意を表す。

予告

○：大阪堺大鳥大社菖蒲祭に琵琶奉納　六月十四日㈰午後一時。大阪琵琶同好会。

○：京都琵琶協会六月定例会　六月二十一日㈰午後一時本部平井会長宅。

故大舘洲楓追善琵琶演奏大会

五月十八日㈰昼東京渋谷東邦生命ホール、主催洲楓会本部（会長大舘美江子女史）、後援日本琵琶楽協会ほか。巡礼お鶴ー服部洲茂▼城山ー榎洲俊▼胄山歌ー横蕚洲讃▼静御前ー平沢洲澄、根岸洲華▼大楠公ー宮脇洲暁、佐藤洲進▼敦盛ー宮田洲寿・紘真泉洲佳▼別れの盃ー岡田洲蜂・紘彼ノ矢洲友▼重衡ー伊東洲湲・紘山田洲鳳▼紅葉狩ー宮下洲泉・紘稲垣洲玲▼俊寛ー金尾洲丈・紘中村洲心▼吹雪の敵ー松崎洲陵、山田洲鳳・紘平井洲誠▼月下の陣ー川本洲光・紘松本洲芳▼城山ー桑名洲聖・前田洲月、荒川洲帆▼乃木将軍ー（

転居

水内媞水女史　京都市西京区嵐山朝日町四五　ホンダマンション二〇三号（電話八六一ー二二四八番

久徳旭蘭女史　鹿児島県国分市下井八三六、下井乙宮神社裏（電話〇九九五四（五）八一一一番）

琵琶ラヂオ放送

五月十四日㈭午後三時十分NHK・FMで原島旭粧女史〝那須与市〟を放送。

あとがき

菖蒲の花が美しい六月、やがて鬱陶しい降りみ降らずみの梅雨期に入る●毎年のことながら梅雨どきは琵琶器のお守りに苦労させられる。湿気をどうして防ぐか、袋に入れたり出したり仲々忙がしい●現在琵琶人の大多数は明治、大正時代から昭和の初期に生を亨けた人々であるようだが「人生五十」は昔の言葉で、今は五十歳を過ぎても老人とは云わない●二十代、三十代は青年、四十代、五十代は壮年、そして六十代、七十代を熟年といい、八十歳以上を老年と云う、それほど人間の寿命は延びて来た●誰が云い出したのかは知らぬが、〝熟年〟とはよい言葉である。琵琶界でもこの年令の人々は「としよりになった」などと考えずに、まだまだ若いという気持ちで第一線に出て活躍し、昔取った杵づかを活かして若いお弟子さんの養成に力を注いで貰いたいものである。

昭和五十六年六月一日発行（非売品）
編集者　植村冥水
発行所　京絃社
吹田市山田東一丁目
〒565
千里台スカイハイツB棟六一四号
電話〇六（八七五）〇三二六番

ものとして景岳は処刑されたのである。勘定奉行水野筑後守は「井伊大老が橋本左内を殺したるの一事、以て徳川氏を亡ぼすに足れり」と云ったという。

人はそれぞれその行為の責任を取らなければならぬ。井伊は、また幕府は、やがてその責任を取るだろう。然しその前に今一人の惜しむべき犠牲者吉田松陰について是非書く必要がある。（未完）

鎌倉幕府

源氏一族の盛衰を顧みて（上）

辻　旭　城

鎌倉は、美しい三浦半島西側の麓にあり、低い丘陵に三方を囲まれ南を相模灘に開いた鎌倉の地形は、天然の要塞として申し分のないものであった。しかも東北西の三方が丘陵だから、屏風を立て廻したように風をさえぎり、暖かく明るい誠に住みよい地勢である。

鎌倉のシンボルは鶴ケ岡八幡宮である。治承四年（一一八〇）秋、安房から関東の豪族を従えて鎌倉入りをした源頼朝は、ここで幕府を開くと共に、源氏一族と幕府守護神として、既に由比ケ浜にあった石清水八幡宮を現在の松ケ岡に移す計画を建て、早速鶴ケ岡若宮の造営に着手した。

石清水八幡宮は、頼朝から逆のぼること五代目、およそ百二十年前に祖先源頼義が奥州征伐のとき、勝戦を感謝して京都の石清水八幡宮を勧請したもので、旗上げしたばかりの幕府にとっても縁起のよい神様であった。鎮座されてから頼朝をはじめ一族の信仰は厚かったが十年後若宮は火災に逢い、占者の勧めで隣地の大臣山を開墾して荘厳な神社を建立し現在に至っているが、それ以来鎌倉幕府のシンボルとなり公私的行事の舞台として登場していた。そのため幕府歴史のエピソードも数々語りつがれていて興味深い。

鎌倉駅から真直ぐに若山大路へ出て来ると、左方鶴ケ岡八幡宮に向って一直線に延びる置道が見られる、広い道の中央に奇麗な石垣を積み、一段高くした参道が続いている。この石垣を〝段葛〟といい、今でも両側には桜が植えられ四月上旬には美事な花のトンネルとなり、鎌倉名所の一つである。

この段葛は、頼朝が夫人北條政子の安産を祈願して築いたものと伝えられる。鎌倉幕府が開かれ一年足らずで頼朝が武家の頭領となり、始めての子が生まれるので頼朝自身が指揮をとり、名だたる武将たちが土石を運んだ。その甲斐あってか男の子が産まれたが、これが悲運の将軍源頼家である。

幕府が政権を掌握した百五十年間が、鎌倉時代で中世とも呼ばれる。武士・豪族に支持された鎌倉幕府が、全国の武士社界を統制した時代だが、朝廷も院制の形式で国の統制権を持ち多くの荘園を支配していたので、公家と武家の二重政治となっていた時代である。二つの権利権力の拡大から、内紛の目まぐるしさは驚くばかりであった。

頼朝が鎌倉で安楽に過ごせたのも、頼家誕生の寿永五年（一一八二）ぐらいのもので、翌年には木曽義仲が反旗を翻えし、義経謀反と息つく隙もない。義経に本当の謀反の意志があったか否かは疑問で、ただ若かっただけに平家追討の勝戦に酔い、少々浮かれ過ぎていたようだ。捕虜平宗盛父子を護送して鎌倉近くまで来たが府内には入れられず、江の島に近い満福寺で頼朝の勘気を解こうと一心に認ためた〝腰越状〟も無視されて、軍功大いに挙げていた義経にしては、頼朝の処置の厳しさが全く意外であったと思われる。

義経の後を追った愛妾静御前も大和吉野で捕われて鎌倉に送られた。文治二年（一一八六）頼朝は政子と共に鶴ケ岡八幡宮に参拝した。その時舞殿で諸将の居並ぶなかに静に舞わせた。静は〝吉野山峰の白雪踏み分けて入りにし人のあとぞ恋しき〟〝しづやしづしづのおだ巻繰返し昔を今になすよしもがな〟と歌って義経を慕い、兄弟の間を憂慮する気持を現わした舞の妙技に、鬼をもひしぐ満座の坂東武者も皆感泣したという。

建久九年（一一九八）十二月、頼朝は相模川架橋落成式に出席の途次落馬し、それが原因で翌年一月死亡した。義経は文治五年（一一八九）四月三十日、妻子と共に衣川で自害し、続く源家直系の悲劇は、政治の実権を握らんと謀る北條一族の緻密で巧みな隠謀に移ることになる。

琵琶歌中の

詩吟・和歌朗詠考（八）

編集部

（琵琶歌 ― 乃木将軍）

凱　旋　　乃木希典

王師百万征驕虜　野戦攻城屍作山
愧我何顔看父老　凱歌今日幾人還

おうしひゃくまん　きょうりょをせいす
やせんこうじょう　かばねはやまをなす
はづわれなんのかんばせあって　ふろう
にまみえん　がいかこんにち　いくにん
か　かえる。

（作者は山口藩士、陸軍大将、大正元年九月十三日明治天皇に殉死、齢六十四。）

「註」　驕虜＝驕慢を露軍。何顔＝どのつらさげて。父老＝戦死した兵士たちの老いた父。

「大意」　皇軍百万驕慢を露軍を征伏し、原野に戦い敵の城を攻めて屍は山のようであった。戦い終って日本に凱旋し国民に迎えられる今、満州に花と散った部下兵隊達の老いた父母を思えば顔を合わせられぬ。沢山の兵を失い生き還ったのは極僅かである。

当時新橋駅頭国民の凱歌に迎えられる将軍の心中がこの詩中にあらわれている。

（琵琶歌 ― 井伊大老）

無　題　　村上仏山

落花紛紛雪紛紛　踏雪蹴花伏兵起
白昼斬取大臣頭　噫噂時事可知耳
落花紛紛雪紛紛　或恐天下多事兆於此

らっかふんぷん　ゆきふんぷん　ゆきを
ふみはなをけって　ふくへいおこる　は
くちうきりとる　だいじんのかしら　あ
あじじしるべきのみ　らっかふんぷんゆ
きふんぷん　あるいはおそるてんかのた
じ　ここにきざすを。

「註」　万延元年三月三日雪中に登城する大老井伊直弼を水戸浪士が暗殺した。桜田門外の桜花が散る花吹雪に交って、時ならぬ吹雪、降り来る雪を踏み花を蹴って水戸浪士達が突如来襲し、白昼公然と井伊大老を暗殺した。これは如何なる事か、乱世の当時の様相が知れる。散る花と共に時ならぬ雪。これは或いは今から天下益々多難となる事を天が人に告げる兆ではあるまいか。

（訂正）前号「爾霊山」の〝男子功名期国難〟は〝国艱〟の誤植。

京　絃　社　転　居

今般「奥書」の通り吹田市千里台に転居致しました。今後共宣敷お願いします。

感想と希望

北川碩水

…勝手な事を云わせて頂けるならば、余り琵琶そのものに関する記事の少ないのが物足りぬ思いです。歴史的な事、学問的な事も結構ですが、往年の琵琶界の事、琵琶人（全盛期の大家、名人、現存する大家の思い出話等）忘れ去られてゆく琵琶の近世の歴史、逸話、芸談等、今後の琵琶界の為、将来の琵琶人の為めにも唯一の真面目な琵琶専門誌である御誌が取り上げて、琵琶一色に塗りつぶされた〝京絃〟誌になって頂いたら感激この上もございません。（後略）

わが師友を語る

兎我野　純

名人松田静水師の青春時代を書いてから暫く休んでいたが、故人になられた数々の師友が懐しく有難く想起される。人間的に心ひか

れるからである。それは弾奏の中に偽らざる人間が語られたからでもある。

さて、昨年藤本錦掌、番匠渚水両兄が相継いでこの世を去った。前者は琵琶を聴く耳が先きに発達しすぎて、遠慮のない批評をしたものである。「君の演奏を聴いていると身体が何だか痒くなるよ、もっとサラリと謡えないか、間延びがして聴いて居られないよ。」と、きつい苦言を呈したものだ。錦心流から錦に移行した名人水藤錦穣師を自宅に招き教えを請い、名人が舞台で倒れられた数日前に、藤本君宅で名曲〝耳なし芳一〟を絃友とも共拝聴し大変感動した。この事は当時〝京絃〟にくわしく披露した通りである。老生もどうやら聴く方ばかり先行して、昭和四年奥伝を允許されてから一向に芸の方は遅々として進まぬ。尤も練習も怠り勝ちなので無理もないが……。

番匠渚水兄とは生前よく琵琶について語り合ったが、彼は琵琶の将来に就いては悲観的であった。そして後半民謡に凝っていた。民謡こそが日本の心だよ、三味線替りに琵琶を器用に弾き、実に楽しそうであった。〝琵琶を楽しむ会〟を創設した時にはその趣旨に賛同し、率先参加して好きな琵琶を互いに弾奏した。同志も増え自由に弾交して楽しみ合った。その後彼が自賛の琵琶民謡を一同と共に歌ったものだ。

昨年五月に彼に会ったのは京都商工会議所での演奏会で、すごく痩せ細った彼に驚いた。意心伝心彼は開口一番、こんなに細くなったよと、その後病院に入ってからも琵琶に対する情熱はいささかも衰えず、家からテープを取り寄せて耳の勉強を怠らずに、いつの日か全快の夢を持ち続け琵琶の将来に意を配った。「自分は洋楽が主であるが邦楽にもそれなりの良さがある。琵琶芸能の良さを知らせたい、それには何よりも琵琶人が益々心技を磨き続ける事が肝要です。」と。

因みに〝現代琵琶人大鑑〟には、西洋音楽しか理解しない息子や娘たちから眉をひそめられながら琵琶を続けているのは、近代純粋理性では到底受け入れられない古い時代の日本人の精神や行動に対して、一抹の同情が捨て切れないからである。時代にづれたものは亡びる。琵琶亡びるという前提から琵琶愛好者は如何にすべきか？ 何も出来ないと思う。せめて同好者は、この琵琶の小さな埋もれ火に手をかざして行こう。彼は八月に病院で亡くなった、惜しい念で一杯だ。彼が〝琵琶を楽しむ会〟で熱演した「勧進帳」が素晴らしく今も耳に残る。合掌。

〝われ以外みなわが師なり〟

永禄三年今川義元を桶狭間に破り正親町天皇の勅を奉じて京に入った。尊皇初の天下人で本能寺に自刃の後従一位太政大臣を贈られた。

織田信長

寸言（47）

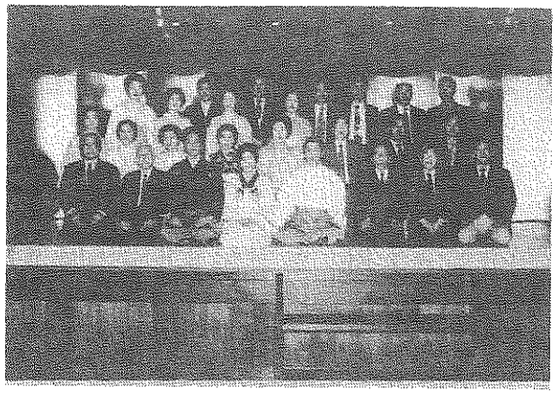
若宮旭登女史の演奏会に参加して

矢吹　旭美津

若宮女史芸歴六十周年記念演奏会が、北陸放送・北国新聞社の後援で四月十八日金沢市に於て開催され、招かれて同日朝京都発特急雷鳥七号に植村寞水、田中鵬水のお二人と共に参画した。会場は同市石引四丁目の豪華絢爛な能楽文化会館でお昼前に到着。正午の開演に早くも数十人の聴客が列をつらね、間もなく満員の盛況を呈して一曲ごとに幕を引き、長谷川錦舟氏司会の鮮やかで名朗且つ簡単な歌詞内容の説明が開幕前にその都度行われて聴衆を喜こばせ何れも名演技を展開されたが、特に旭登会員の琵琶・詩吟共それぞれの個性を発起して若宮師指導の熱心さが窺われ、終始万雷の拍手が広い会場を動かせた。六時目出度く終演、記念撮影のあと天下の名勝兼六公園内の料亭三芳庵に関係者約六十人が列席し、立派な料理で乾盃、若宮女史の息女旭佳さんの素人離れのした日舞をはじめ余技続出で本日の成功を祝し、それぞれ旅館に引き上げた。（当日の出演者と曲目別項参照）。

翌十九日は金沢市の中心部から約八キロ、雪の白山連峰医王山麓の山菜料理を食べさせる有名な〝銭かめ（屋号）〟に案内されたが、

軒先きに五十センチの残雪のある〝銭かめ〟は何百年の古い歴史を持ち、座敷には大きな囲炉裏に炭火が赤々と燃えて部屋を温ため、如何にも野趣に充ちた雰囲気を満喫せしめる裡に、珍らしい数々の山菜料理が次ぎ次ぎと運ばれ、或いは眼下の清流から採ったばかりのいわなの生け作り、焼きたてのいわなを熱酒に浸した大鉢の廻し呑みや、熊、雉の料理など珍重な昼食に一同驚き且つ舌鼓を打ちながら時間の経つのも忘れ、三時ようやく席を立って若宮女史の好意を謝しながらそれぞれ帰途についた。



京都琵琶協会「各流派合同演奏会」感想記

四月二十九日（天皇誕生日）、京滋の叙勲に輝く人々を朝刊に見て、参賀のよろこびを心に描いた。

十時、おだやかな朝の光を浴び、若葉の金比羅宮のお社に詣ず。

十時半、揃って会場準備に取りかかる。舞台は前日に出来上り、マイクは木下皇水氏が操作調節に当たる。大生花、青畳に座蒲団、お茶と準備はすべて整うた。

庭の赤い椿、山吹がガラス越しに目に映る。名古屋来賓の三氏をお迎えして控室へ案内す。

正午、会長開会の辞で開演。

会員の演奏振りは真剣でいずれも個性を発揮され、聴衆を楽しませて両者一体、琵琶の真髄を究めようと努力す。時々掛声や拍手が場内を湧き立たせる。百数十名満員の盛会に廊下の襖を外ずしてはみ出てもらう。

来賓名古屋の長谷川さんの美しい音質と節廻わし。松浦さんの音量豊かにして崩れの弾法の妙えなる。阿部先生の力強い発声の中に繊細艶麗な節廻わし、弾法の力強さに満堂ただただ感に打たれるばかりである。

また彦根西川磯水さんの番外「新撰組」の演奏を力強く拝聴す。

次いで牧秋静氏より祝電披露があり、心より厚く謝意を表したい。

「二〇三高地」平井会長の力づよい弾法は神に入り終演を飾った。

植村寞水氏のおだやかな閉会の辞あり。

終って関係者三十余名は乾盃食事を共にし、本日の反省と余技などもあって和やかに終了散会す。（出演者と演奏曲目別項参照）

五、一（鴨水記）

新作　本能寺

望月啞江作詞

織田が激怒の火柱や　煙は黒し本能寺
囲繞す豪にみち溢てる　水深しとて凄まじき
人の怨望に比ぶれば　見よや千尋も数ならず
光秀なんじその時に　中国勢を如何に視し
六月初の夜をかけて　早旦に大事遂げんとて
神とや謂わず機に敏き　羽柴が師ゆる精鋭の
疾風の如きに備へずに　いかで天下を獲べしや
本能寺深溝幾尺　吾就大事在今夕
茨粽在手併茨食　四簷梅雨天如墨
老坂西去備中道　揚鞭東指天猶早
吾敵正在本能寺　敵在備中汝能備
智将の数に記されし　名は明智てう千兵衛が

西方視る眼くらみたる　武運の末も思ほへば
叛かん由縁のいかばかり　ありとて正道に非るを
咎めし天が所為なれや　食ふ茨粽の茨だにも
覚えぬまでに苦しみし　心の果てに忌はしき
逆臣の名もものかわと　奪いし天下三日月の
盈つる夜末だき夏草に　置く露の間の夢と見て
滅び去りしも是非なけれ』

故松野紫雲氏霊前に琵琶献奏

三月三十一日西宮市三浦蓮水女史宅で故人満中陰の法要が営まれ親戚や門下生参集、故人作詞「屋島懐古」を三浦女史が献奏して故人を偲び参列者に感銘を与えた。

神武館道場発表会

四月五日(日)昼神戸文化大ホール。ポートピア'81神戸博協賛の第二十五回発表会で詩吟、剣詩舞七十三番披露の内「琵琶劇一ノ谷合戦」で立方十九人を前に三浦蓮水女史が二十七分間に亘って琵琶を弾奏し超満員千八百人の観衆を感激せしめた。

若宮旭登芸歴六十年記念演奏会

四月十八日(土)正午金沢市能楽文化会館、主催若宮旭登女史。特別出演＝東京藤間秀豊、同鈴木流泉。協賛＝金沢旭会。賛助出演＝金沢藤蔭秋夫、東京長谷川錦舟、金沢水谷充水、京都矢吹旭美津、大阪高千穂旭楓、京都植村寞水。（第一部）詩吟七題▼弁財天ー野崎桂優、長田桂梅▼青の洞門ー土田竜山▼未練西行ー安田旭富▼大楠公ー中田旭麗▼鉢の木ー水谷充水▼詩吟三題▼二〇三高地ー吉田旭操▼粟津ケ原ー田中鵬水、矢吹旭美津▼安達ケ原ー鈴木流泉▼秋風故郷の山ー長田桂友、高田桂舟・立方藤蔭秋夫。（第二部）柳の精ー会主若宮旭登▼詩吟五題▼衣川ー若宮旭佳▼坂崎出羽守ー高千穂旭楓▼詩吟舞静御前ー桂優、桂泉、桂梅・立方藤蔭▼詩吟五題▼恩讐の彼方にー長谷川錦舟▼石童丸ー植村寞水▼大物の浦ー会主若宮旭登・立方藤間秀豊。

京都琵琶協会四月例会

四月十九日(日)昼本部平井会長宅。桜花もすっかり散り葉桜の頃となったこの日馬場鴨水、林旭蒲、楊嶽水、楊光子、田中歉水、梅原旭濤、山岡旭清、牧秋静、水内媛水、平井春嶺、同夫人及び旭濤門下の山崎旭栄、高橋正雄各氏参集、協会並びに旭濤会の春季演奏会のプログラム発送準備を行い、終了後数氏の研修演奏の後協会員一同夕食を共にして夕七時散会した。

薩摩・筑前春季琵琶演奏大会

四月十九日(日)昼松山市民会館、主催愛媛琵琶連盟、後援愛媛県教育委員会ほか。君が代ー会員▼松の廊下ー渡辺▼白虎隊ー白石▼伏見の吹雪ー大木▼義士の本懐ー大西▼那須与市ー森本旭琵▼壇の浦ー斎藤旭苑▼鴨川の露ー和田旭秀▼堅田落(上)ー遠藤旭佳▼敦盛ー栗田絲水▼曲垣平九郎ー西森旭生▼加藤清正ー石塚旭奏▼戦艦大和ー佐藤晃絃▼白虎隊ー村上旭隆▼大楠公ー白石旭優▼吉野山懐古ー谷口旭英▼花の若武者ー立花宵水▼西郷隆盛ー外久旭好▼安宅ー佐竹旭都▼未定ー浅田芦水。

日本芸術琵琶普絃会四月例会

四月十九日(日)昼東京文京区大塚六丁目貸席京屋。諸弾法ー錦幽▼湖水渡ー内田隆章▼白虎隊ー杉山富士代▼狩野の雨ー鈴木好水▼三成の最期ー佐藤旭尚▼伽羅の兜ー丸田旭琴▼俊寛(上)ー坂入晴峰▼須磨の春ー福島張水▼若き敦盛ー金森旭弾▼花の白虎隊ー青木早水▼利休の最期ー山崎錦幽。以上研修を終り小宴の後六時散会。

伏見醍醐寺にて琵琶大会

四月十九日(日)昼、大阪琵琶同好会協賛。岩壁の母ー上村多恵子、坪内操▼秋風故郷の山ー辻旭城▼関ヶ原ー石橋旭嶺▼安宅の関ー団野旭兜・絃八千代▼井伊大老ー田中歉水▼坂崎出羽守ー天津八千代▼新撰組ー中島旭穂。外に詩吟六、扇舞三、民謡七、剣舞二。

日本琵琶悠絃会四月例会

四月二十六日(日)昼東京中野区大和地区センター。門琵琶合奏ー一峰、錦幽▼敦盛ー八束一峰▼月下の陣ー木村松咏▼新撰組ー伴旭友

▼西郷隆盛ー中村洲心▼白虎隊ー畑嘉水▼薄陽江(上)ー金尾洲丈▼彰義隊ー清水源城▼鉢の木ー大井錦淀▼桜狩ー大富士岳鮮▼菅公ー一峰▼小曲本能寺ー山崎錦幽▼巌流島ー長谷川錦舟▼詩吟二題ー天羽岳水、石塚松鷹。以上研修の後六時散会。

各流派琵琶合同演奏大会

四月二十九日（天皇誕生日）正午京都東山安井神社金比羅宮会館、主催京都琵琶協会。桜ー山田明嶺▼白虎隊ー楊嶽水▼小栗栖ー桜井旭冨▼桜狩ー馬場鴨水▼道成寺ー植村寞水▼藤戸の渡ー林旭蒲▼羽衣ー水内媛水▼八甲田山の露ー来賓長谷川秋楓▼青葉の笛ー山岡旭清▼川中島ー来賓松浦秋翠▼新撰組ー（番外）西川磯水▼西郷隆盛ー牧秋静▼菊の礎ー矢吹旭美津▼井伊大老ー木下皇水▼吉野落(下)ー田中歉水▼那須与市ー来賓阿部秋子▼伽羅の兜ー梅原旭濤▼二〇三高地ー会長平井春嶺。

筑前琵琶嶺派春の定期演奏会

四月二十九日(祭)昼博多駅前大博多ビル十二階ホール、主催博多旭蝶会（会長嶺旭蝶女史）後援福岡県教育委員会ほか（有料）。君が代ー隈部、岡本、旭蝶▼三つの蝶ー阪部、富▼川中島ー富、飯田▼那須与市ー富、飯田▼本能寺ー岡村、阪部▼敦盛ー嶺旭蝶外六人▼帰って来いよー青山旭子外少年部一同▼巌流島の決闘ー梶野▼地震加藤ー松尾、藤▼関ヶ原ー梶野▼耳なし芳一ー青山旭子▼玉藻の前ー旭蝶、旭子、梶野・琴、笛各一。

日本琵琶楽協会関西支部総会

四月二十六日(日)午後二時から国鉄西大路駅前の料亭「京みやこ」で開催。参会者は（順不同）山崎旭萃、樹本旭風、三浦蓮水、大迫旭山、牧秋静、木下皇水、梅原旭濤、田中旭昇、矢吹旭美津、高千穂旭楓、大野皎月、伊勢谷安江、中島旭穂、福西旭紅、馬場鴨水、平井春嶺の各氏。平井春嶺氏の司会にて、山崎支部長の挨拶、次いで平井氏より総会議題を次々進行した。即ち五十五年度事業報告、同収支決算報告につき全員承認、なお収支決算については伊勢谷会計委員が四月十四日監査を行い、その正確な旨の報告を行った。五十六年度事業計画については、五月三十一日(日)京都商工会議所にて第四回名流会開催、八月頃第三回懇親旅行開催等を役員間で考えているが、他にも希望の件があらば五月三十一日の名流会当日でも良いから申し出て貰いたき旨司会者から話した。

以上で総会を終って引続き懇親会に入り、隠し芸など飛び出して一同和気藹々裡に午後七時過ぎ散会した。（UVW生）

合奏団〝鼎〟定期演奏会

四月二十九日(祭)昼大阪市立労働会館森の宮ピロティホール。日本楽器による幻想曲ー筑前琵琶香川祥子外に尺八三、箏二、十七絃一▼琵琶・十七絃二重奏のための三つの詩ー薩摩琵琶片岡陽子、外に十七絃一▼ディヴェルティメントー筑前琵琶佐々木祥子、外に篠笛一、尺八二、三絃一、箏二、十七絃一、打楽器二▼仲秋詩抄ー筑前琵琶一坊寺謙一、外に尺八、十七絃各一▼謳春ー筑前琵琶佐々木祥子、薩摩琵琶片岡陽子・外に篠笛、二十絃箏、三絃各一、尺八三、箏三、十七絃二、打楽器三。

梅原旭濤春季演奏会

五月三日(日)正午京都東山安井神社金比羅宮会館、後援京都琵琶協会。連休第一日目で聴衆の入りが気遣われたが〝曇り俄か雨〟という天候が幸いしてか満員の来聴者を迎え終始熱心に静聴し一曲毎に万雷の拍手を送った。六時終演、記念撮影に続いて関係者一堂に会し乾盃、余技なども続出して歓を尽くし最後に旭濤会の万歳を三唱して目出度く散会した。弁の内侍ー山田明嶺▼石童丸ー中谷濤泉▼柴田勝家の妻ー高田旭章▼長柄の秋風ー林旭蒲▼秋風故郷の山ー濤泉・絃旭香、旭濤▼勿来の関ー田中歉水▼壇の浦ー山岡旭清▼堅田落ー加藤旭晃▼衣川ー清水旭翠▼会津白虎隊ー楊光子▼湖水乗切ー牧秋静▼薩摩の乙女ー山崎旭栄▼西郷隆盛ー木下皇水▼坂本竜馬ー岡本旭村▼敦盛ー楊嶽水▼小栗栖ー会主梅原旭濤▼石川啄木ー植村寞水▼新撰組ー国友旭香▼常陸丸ー馬場鴨水▼未練西行ー（来賓）大阪塩谷旭洲▼彰義隊ー平井春嶺。